はじめに

私は『世界史の構造』（二〇一〇年六月刊）を書いていたとき、古代ギリシアの哲学についてもっと詳しく論じたいと思った。しかし、全体のバランスから見て、それは難しく、別に一冊の本として書くほかないと考えなおしたのである。その結果できあがったのが本書である。本書は、したがって、前書『世界史の構造』で示した理論的枠組を前提している。もちろん、それを読んでいなくても、本書は理解できるはずである。念のために、その要約と、それがいかに本書にかかわるかを示す、「『世界史の構造』から『哲学の起源』へ」という文を、巻末に付すことにした。もし本文の記述が不分明であれば、これを参照していただきたい。

本書の最初の稿は、月刊文芸誌『新潮』に連載した。その際、編集長の矢野優氏に大変お世話になった。氏の支えがなければ、本稿はできあがらなかっただろう。心より御礼を申し上げる。単行本の出版に際しては、『世界史の構造』と同様、岩波書店の小島潔氏のお手を煩わせた。深く感謝する。

二〇一二年九月一五日　於北京

柄谷行人

目　次

はじめに

序　論……1
1　普遍宗教……2
2　倫理的預言者……7
3　模範的預言者……12

第一章　イオニアの社会と思想……17
1　アテネとイオニア……18
2　イソノミアとデモクラシー……22
3　アテネのデモクラシー……28
4　国家と民主主義……32

5 植民とイソノミア……35
6 アイスランドと北アメリカ……43
7 イソノミアと評議会……50
第二章 イオニア自然哲学の背景……57
1 自然哲学と倫理……58
2 ヒポクラテス……65
3 ヘロドトス……70
4 ホメロス……77
5 ヘシオドス……84
第三章 イオニア自然哲学の特質……93
1 宗教批判……94
2 運動する物質……96
3 制作と生成……104

第四章　イオニア没落後の思想……115
1　ピタゴラス……116
a　輪廻の観念　b　二重世界
c　数学と音楽
2　ヘラクレイトス……135
a　反民衆的　b　反ピタゴラス
3　パルメニデス……148
a　ヘラクレイトスとパルメニデス
b　ピタゴラス批判　c　間接証明
4　エレア派以後……164
a　エンペドクレス　b　原子論
c　ポリスからコスモポリスへ
第五章　アテネ帝国とソクラテス……175
1　アテネ帝国と民主政……176

2　ソフィストと弁論の支配……182
3　ソクラテスの裁判……187
4　ソクラテスの謎……194
5　ダイモン……201
6　ソクラテスの問答法……205
7　プラトンとピタゴラス……212
8　哲人王……216
9　イソノミアと哲人王……222
注……229
附録『世界史の構造』から『哲学の起源』へ……247
岩波現代文庫版あとがき……255
古代ギリシア関連地図(258)／古代ギリシア史年表(260)／思想家年表(263)

序

論

1　普遍宗教

紀元前六世紀ごろ、エゼキエルに代表される預言者がバビロンの捕囚の中からあらわれ、イオニアには賢人タレスがあらわれ、インドにはブッダやマハーヴィーラ(ジャイナ教開祖)が、そして、中国には老子や孔子があらわれた。これらの同時代的平行性は驚くべきものである。この現象をたんに社会経済史から説明することはできない。たとえば、マルクス主義者はこれを、宗教や哲学を経済的土台(生産様式)によって規定される、イデオロギー的・観念的な上部構造とみなしてきた。しかし、経済的土台の変化を見ても、この時期に起こった変化は十分に説明できないのである。

そのため、この時期の変化を、観念的上部構造の次元で独自に起こった精神的革命あるいは進化として見る見方が生まれる。その代表的な例は、アンリ・ベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』である。ベルクソンによれば、本来、人間の社会は小さな「閉じた社会」であり、道徳もそれに合わせて作られた。では、それが開かれることはいかにしてありえたのか。人類社会がこの時期、閉じられた氏族社会から多民族が交易する世界帝国に拡大していたことは明らかだが、それだけでは、「開いた社会」をもたらすこと

はない。ベルクソンはいう。《閉じた社会から開いた社会へ、都市（シテ）から人類への移行は、単なる拡大によっては決して可能でないだろう。この両者は同一本質のものではない[1]》。

ベルクソンはこの変化を経済的土台ではなく、宗教のレベルにおいて見ようとした。「閉じた社会」とは、宗教でいえば、「静的宗教」であり、「開いた社会」とは「動的宗教」である。静的宗教から動的宗教への飛躍をもたらしたのは、「特権的個人」である。さらに、ベルクソンは、その根底にエラン・ダムール（愛の飛躍）なるものがあり、それが特権的個人の行為を通して発出するのだという。

しかし、私は「閉じた社会」から「開いた社会」への飛躍が宗教のレベルでおこったということを、経済的土台から説明できると考える。ただし、従来のように「生産様式」からではなく、「交換様式」から見ることによって、である。たとえば、宗教におけるアニミズムから呪術―宗教―普遍宗教にいたる発展は、交換様式の変容として見ることができる。

通常、「交換」と考えられるのは、商品交換である。私はそれを交換様式Cと呼ぶ。しかし、これは、共同体と共同体の間に生じるものであり、共同体や家族の内部では生じない。後者において存在するのは、贈与とお返しという互酬交換、すなわち交換様式Aである。さらに、それらと異なるタイプの交換、すなわち、交換様式Bがある。これは支配―被支配関係であり、一見すると交換に見えない。しかし、支配者に服従する者

が、そのことによって安堵を得るならば、それは交換である。国家はこのような交換様式Bに根ざしている。

宗教の変化も、このような交換様式の変化から見ることができる。簡単にいうと、アニミズムでは、万物にアニマ(霊)があると考えられている。ゆえに、人はアニマを抑えないと、対象と関係することができない。たとえば、動物を狩猟することができない。その場合、アニマに贈与することによってそれを抑え、対象をたんなる物にしてしまう。それが供犠である。死者の埋葬・葬礼も、贈与によって死者の霊を抑えるためになされる。呪術もまた、このような交換、すなわち交換様式Aにもとづいている。アニマに贈与することによって、自然をたんなる物として扱えるようにすること、それが呪術なのだ。このように考えると、呪術師はむしろ、対象を物として扱う、最初の科学技術者だったということができる。

この場合、注目すべきことは、遊動民のバンド社会にはアニミズムはあるが、呪術が未発達だということである。「閉じた社会」や「静的宗教」は、彼らが定住したのちに形成されたのだ。その意味で、最も初期的な遊動民社会は「閉じた社会」ではなかった。そもそも、「閉じた社会」は自然にあるものではない。それは定住化によって生じた危機に直面して、まさに「飛躍」として生じたのである。定住化とともに、富や力の蓄積が可能になり、階級や国家が発生する可能性が生じた。氏族社会はそれを、互酬的交換

を義務づけることによって防いだといってもよい。

くりかえすと、呪術は定住以後の氏族社会で発達した。定住によって、多くの他者および死者と共存することになった人々の中で、互酬的交換の義務と同時に、さまざまな呪術が発達したのである。したがって、氏族社会において、首長や呪術師の地位は高まった。しかし、それが決定的になるのは、国家社会においてである。都市国家の抗争の中から集権的な国家が出現するとき、王＝祭司の権力が強化されるとともに、神もまた超越化されたのである。

交換様式という観点から見ると、専制国家は、交換様式Bが優越する状態である。しかし、この場合、王も臣民もこの関係を、征服―服従の関係であるよりもむしろ、臣民が王に対して積極的に服従し貢納することによって、王から保護や再分配を賜るかのような互酬的関係(交換様式A)と見なしている。同様のことが神と人間の関係についてもいえる。

専制国家では、神は人間を支配する者として超越化されるが、神と人間の関係には、それ以前の呪術にあったような互酬的な関係が残っている。そこでは次のように考えられている。神は超越的であり、人の意志を越えた存在である。が、人が神に贈与し祈願すれば、神は人の願いを聞かなければならない。このような関係においては、神の超越性は十分に成立していない。たとえば、国家が敗れた場合、神は人間に棄てられてしま

うからである。

つぎに、諸国家の抗争の結果、広域国家(世界帝国)が形成される。世界帝国はたんに軍事的な支配の拡大(交換様式B)だけでなく、広範な交易圏(交換様式C)の成立によって可能である。ここでの神は、それまでの氏神や部族神を越えた「世界神」となる。しかし、それはまだ普遍宗教ではない。帝国が征服されれば、そのような神も棄てられるからだ。したがって、世界帝国は、普遍宗教成立の必要条件ではあっても、十分条件ではない。

普遍宗教もまた、交換様式の観点から見ることができる。一言でいえば、それは、交換様式Aが交換様式B・Cによって解体されたのちに、それを高次元で回復しようとするものである。いいかえれば、互酬原理によって成り立つ社会が国家の支配や貨幣経済の浸透によって解体されたとき、そこにあった互酬的＝相互扶助的な関係を高次元で回復しようとするものである。私はそれを交換様式Dと呼ぶ。

Dは、Aを高次元で回復しようとする。しかし、このことは、ひとまず、Aを否定することなくしてありえない。別の観点からみれば、それは宗教における呪術性を否定することである。マックス・ウェーバーが、普遍宗教の特質を〝脱呪術化〟に見出したことは、その意味で正しい。脱呪術化は概ね、自然科学との関係で考えられるが、ウェーバーがいう脱呪術化とは、祭祀や祈願というかたちで神を人間の意志に従わせることの

否定である。《宗教的行為は「神礼拝」ではなくて、「神強制」であり、神への呼びかけは、祈りではなくて呪文である[2]》。神強制は、自然に対する科学的態度によって、否定されるのではない。その逆に、神強制の断念によって、自然に対する科学的態度が可能になるのだ。

ここでウェーバーがいうことを「交換様式」の観点から見れば、脱呪術化とは、神と人間の関係において互酬性が放棄されるということを意味する。これは実は容易なことではない。たとえば、今日のどんな世界宗教にも、祈願というかたちで「神強制」が残存している。だから、もし神強制が断念されるということが起こったとしたら、それは世界史的な事件だというべきなのだ。だが、このような事件は、特権的人格があらわれて「閉じた社会」を開いたというようなことでは説明できないのである。

2　倫理的預言者

神強制の断念はいかにしてありえたのか。その一例はユダヤ教の成立過程に見出される。旧約聖書には、「神と人間」の契約、モーセに率いられたエジプトからの脱出、カナン(パレスチナ)に定住した後の、ダビデ、ソロモンにいたる国家的発展の歴史が書かれている。しかし、旧約聖書が最終的に編纂されたのは、バビロン捕囚から帰還し教団

が確立されたのちであり、そこに書かれた「歴史」は、実際は、この時点から再構成ないし創造された物語でしかない。つまり、普遍宗教としてのユダヤ教は、ユダ王国が滅ぼされ捕囚としてバビロンに連れて行かれた人々の間で成立したのだが、それが始原に投射されたのである。

ユダヤ民族は、多数の遊牧民部族の盟約連合体としてはじまった。そのとき、彼らはエホバの神の下で盟約を結んだ。しかし、これは例外的な事態ではない。メソポタミアの都市国家もギリシアのポリスも同様である。多部族が一つの都市国家を形成するとき、新たな神を信奉するというかたちをとるのである。それは社会契約の一形態である。したがって、ユダヤ民族の「契約」だけを特別視することはできない。

ユダヤの部族連合体が形成されたのは、周辺に巨大な国家(エジプトやアッシリア)が存在したからである。つまり、それは外の国家に対抗するかたちで形成された。だが、彼らがカナンの地に定住して農耕を開始したとき、彼らの生活はそれまでの遊牧民的時代とは根本的に違ってきた。それまでの部族連合体から、ダビデ、ソロモンの時代にはエジプトのような「アジア的専制国家」に転化したのである。人々が遊牧民時代の神のかわりに農耕社会の神(バール神)を信じたことは自然のなりゆきだったといえる。

ソロモンの時代に、神は王権の強大化を反映して超越化されている。しかし、それは所詮、氏族神の延長にすぎなかった。いかに超越的な神といえども、戦争に負ければ棄

てられてしまうからだ。これは、ひとが神に対して服従的であってもなお、神を贈与によって「強制」しようとするような関係にあったことを意味する。つまり、このような宗教は本質的に呪術的なのである。

事実、ソロモンの後に分裂した二つの王国の一つ、イスラエル王国が滅んだとき、神は棄てられた。つぎに、ユダ王国が滅んだときも同様である。ただ、このとき、捕囚としてバビロンに連れて行かれた人々の間で、未曾有の事態が生じた。つまり、戦争に敗れ国家が滅んでも、神が棄てられず、逆に人間にその責任を問うような転倒が生じたのである。それが「神強制」の断念であり、宗教の「脱呪術化」である。それは神と人間の関係の互酬性を否定することであり、これによって神と人間の関係が根本的に変わった。だが、それは、別の観点からいえば、人間と人間の関係が根本的に変わったということである。

バビロンに連れて行かれた人々は、比較的に知識階層が多く、また彼らは主として商業に従事した。すなわち、彼らは宗教もふくめた旧支配機構から離れ、同時に農耕共同体からも離れて、個人として存在したのである。そのような諸個人が、神の下に新たな盟約共同体を形成した。それが「神と人間の契約」という形をとったのである。これは遊牧民の部族連合体の結成と似て非なるものだ。それはまた、王朝時代に活動した預言者の思想とも異なる。

預言者らは官僚や祭司の横暴、人々の堕落、貧富の差を批判し、このままでは国家が滅亡すると警告した。彼らがいうのは、遊牧民の部族連合体の回復、いわば「砂漠に帰れ」ということであった。それは交換様式Aの回復、つまり、互酬的な共同体の回復である。しかし、そのような預言者はユダヤ教に特徴的なものではなかった。遊牧民が専制国家の下で農耕民となったような所ではどこでも、共同体・国家の危機においてそのようなタイプの預言者が出現しただろうから。が、Aの回復を唱えることそれ自体がただちに普遍宗教をもたらすことはない。

一方、バビロンに生じたのは、部族的拘束から離れた自由・平等な個々人の盟約連合体である。それは交換様式Aの高次元での回復、すなわち、交換様式Dだといってよい。高次元での回復ということは、B・Cだけではなく、ある意味でAそれ自体の否定なくしてありえない。つまり、それは先ず、個々人が部族共同体や国家から離脱することを必要とするのだ。そのような条件を、捕囚という事態が与えたのである。

ところが、バビロンの捕囚となった人々は、約四〇年後に、バビロニアを滅ぼしたペルシア帝国によって解放され、エルサレムに帰還した。以後、ユダヤ教団は国家なき民を統治する機関となった。つまり、バビロンにあった盟約共同体は、祭司・律法学者が統治する集団に変質したのである。『聖書』の成文化がすすめられたのは、その頃である。その過程で、それまでの預言者の活動、あるいはモーセの神話などは新たな意味づ